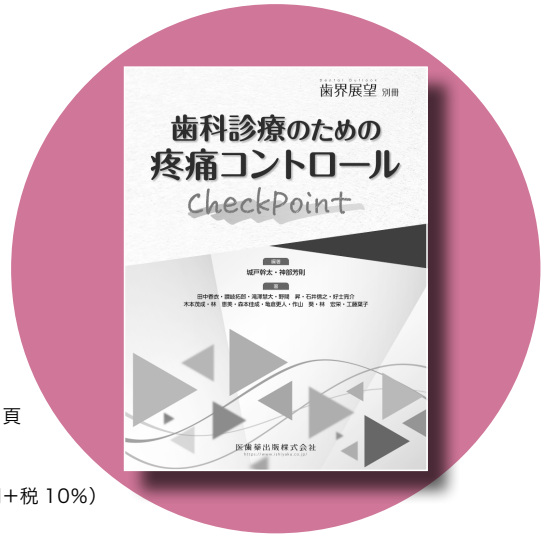
Book Review

月刊「歯界展望」別冊

歯科診療のための疼痛コントロール CheckPoint



城戸幹太・神部芳則　編著

A4 判変，192 頁
カラー
定価 7,150 円
（本体 6,500 円＋税 10%）
医歯薬出版刊

Reviewer
今村佳樹　Yoshiki Imamura
（日本大学歯学部特任教授）

歯科診療において，もっとも本質的な目的の一つに患者が訴える痛みのコントロールがある．本書では，痛みが生じる機序からそのコントロール法までを末梢と中枢の観点から解説してあり，歯科医療の第一義的な問題に向き合うための最新の知識をバランスよくまとめてある．日常診療の助けとして，チェアサイドに置いておきたい一冊である．

患者が訴える痛みには，患者が受診するうえで主訴となった痛みと，歯科治療を行ううえで生じる痛みがある．このため，歯科医師は口腔領域の痛みを伴う疾患に関する正しい診断ならびに治療に伴う知識を持ち合わせておく必要があり，また，痛みを生じさせる医療行為とその軽減，あるいは予防手段を理解しておく必要がある．痛みには，最も古典的・基本的概念として，口腔局所に加わった痛み刺激が中枢に伝わってそれを脳が相応する痛みとして認識するもの（侵害受容性疼痛）がある．歯および歯周組織の急性炎症や外傷，歯科治療時の侵襲によって生じるもので，この場合の痛みの多くは局所において痛みをコントロールすることで軽減が得られる．この局所の痛みのコントロールは歯科医療の根源をなす問題であり，歯科医学教育の中でも最も重点が置かれてきた領域である．

本書においては，痛みのコントロール法として，消炎鎮痛薬の具体的な使用法から局所麻酔薬の選択，投与方法，さらには，原因となる歯科疾患別の治療法までを各領域の専門医が最新の医学知識を用いて具体的にわかりやすく解説している．これらは，現時点において歯科医師がすべからく有しておくべき基本知識と言える．一方，痛み刺激は中枢に伝わり，脳が反応，修飾して痛みとして認識，記憶されるもので，一部の歯およびその周囲組織に由来する急性痛は，局所の痛みのコントロールだけではうまく制御することが難しく，この脳の活動をコントロールすることで軽減させることが可能である．この領域の歯科医療としては，術中・術後痛の管理が該当し，高位中枢に作用する薬剤を用いた痛みのコントロールが含まれる．卒後専門教育において歯科医師が習得すべき医療行為が主体を為すが，歯科固有の医療として近年の歯科医師国家試験にも出題される内容であり，本書でもその概要が記されている．今後特に必要とされる領域であり，現時点において個々の歯科医師が対応までを求められるものではないとしても，知識として有しておくべき内容といえるであろう．

最後に，歯科を受診する患者の中には，歯および歯周組織に由来しない口腔領域の痛み（いわゆる非歯原性の痛み）を主訴とする者もおり，歯科医師はこのような痛みの診断，治療までも求められるようになってきている．本書においては，一連の痛みに対しての鑑別診断ならびに基本的な対応についても触れてあり，詳細は専門書に譲るとして，歯科医師が有すべき基本知識をコンパクトにまとめてある．